

第68回全国英語教育研究大会(全英連滋賀大会)報告

広報部 川田裕貴(開成中学校)

今年度の全英連大会は「Be Active! ～児童・生徒が主体的に学ぶ英語教育～」を大会コンセプトとして、授業実演や様々な授業実践報告などが行われました。そのうちの幾つかを御紹介致します。

小学校授業実演

コミュニケーションの楽しさを味わい、自ら求めて学ぶ児童の育成

発表者：大津市晴嵐小学校 平山 美穂 教諭

助言者：滋賀大学 大嶋 秀樹 氏

1. 研究テーマの設定理由

平成29年3月告示の新小学校学習指導要領において、小学校では中学年に外国語活動、高学年に外国語が導入されることになった。高学年では、「素地」の上の段階の「基礎」を養うこととされ、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能の習得を目指す。つまり、それまでの学習や経験で蓄積した英語での話す力・聞く力を駆使して、自分の力で質問したり、答えたりすることができる児童の育成が求められているのである。授業者の平山教諭は、そのようなコミュニケーション能力の育成が、外国語を主体的に学ぼうとする原動力になると考えた。そして、児童同士の活発なコミュニケーションを促す工夫を追究するため、本テーマを設定した。

2. 研究の内容

主な指導の工夫は、以下に挙げる3つである。

- (1) 「聞きたい」「話したい」という必然性のある活動を設定し、自分の力で質問したり答えたりする楽しさを味わう授業づくりを行う。
- (2) 児童がコミュニケーションに自信をもって臨むことができるよう、スモールステップの帯活動のあり方を工夫する。
- (3) 児童同士の活発なコミュニケーションを促すため、コミュニケーション方略の指導を行う。

3. 授業実演について

本単元は、ALTからの「滋賀県のおすすめの体験を知りたい」というリクエストから学習が始まる。過去を表す表現を使うことで、自らの体験を振り返りながら故郷のよさを再発見し、それに基づいて滋賀県の魅力を伝えられるようになる、という単元計画である。前時までに学校行事や出来事についての英語表現に慣れ親しみ、本時でいよいよ自分たちの体験を伝え合うという授業であった。

まず、ALTのリクエストが活動に必然性をもたらしており、児童の「伝え合いたい」という意欲が授業全体を通じて非常に高かったように思われた。巨大な講演会場の大勢の前で、多くの児童が常に挙手し、積極的に発表しようとしていたのである。これは自分の英語に自信があるという証拠であり、スモールステップの活動を継続して行ってきた成果であろう。また、平山教諭はほぼオールイングリッシュで授業を進めていたが、突発的な英語の指示も児童はよく理解し、

動けていた。日頃から基本的な英語表現に慣れ親しませていることがうかがえた。

大勢の前で自分の修学旅行について発表し喝采を浴びた少年の笑顔が今でも目に焼きついている。英語を通してあのような経験をしたことは、英語学習に対する動機付けに留まらず、彼の自己肯定感を高める、素晴らしい記憶になったに違いない。

中学校授業実演

即興的な対話力と発信力の育成 ～言語活動の指導と評価～

発表者：竜王町立竜王中学校 関口 真 教諭

助言者：関西大学 今井 裕之 氏

1. 研究テーマの設定理由

2020年度実施の新学習指導要領で「即興で伝え合うこと」が示され、これからますます即興的な言語活動が重要視されていく中で、「即興的に自分の言葉で英語を話す」ことができる生徒を育てたい、積極的な姿勢で前向きに英語と向き合い、生き生きと表現できる生徒を育てたいという思いからこの研究テーマの設定に至る。

2. 研究の内容

生徒の即興的な対話力・発信力を育成するために、様々な即興性のある言語活動の指導に取り組んでいる。その工夫は主に以下の5つである。

- (1) All English の授業での教師と生徒、生徒同士のやり取りの中での即興性の育成
- (2) 生徒が間違いを恐れずに自信をもって英語を発信できるようにする指導
- (3) ICT を活用してテンポの良い授業をすることで、生徒による英語の活動量を確保する
- (4) 帯活動の効果的な活用
- (5) 教科書を題材にした即興性を高める言語活動の指導とルーブリックを使ったパフォーマンス評価の工夫

3. 授業実演について

授業で扱われた単元は、New Horizon English Course 3、Unit 6 "Striving for a Better World" である。この Unit 6 という単元は、世界平和に貢献したノーベル平和賞の受賞者たち、その中でも、民主主義と人権のために戦ったミャンマーの政治指導者アウンサンスーチーの半生を紹介する内容となる。中学3年間の最後のユニットに当たり、言語材料としては接触節から始まり、関係代名詞の主格・目的格と続く。いわば3年間の総決算ともいえる単元である。

指導計画では、「ペアで英語を話す」、「教師の質問に答えたり、ペアで話したりする」、「リテリングする」、「グループで説明文を作る」、「議論する」などの活動が多く見て取れ、日頃からやり取りを重視した活動を組み込んでいることがうかがえる。授業実演となった本時は、Unit 6 のまとめとして発表活動を行うという位置づけ（総時数9時間のうちの8時間目）で、本時のねらいは「最も共感できるノーベル平和賞受賞者についてグループで議論し、自分たちが平和のために何ができるかを考え、共有し合うことができる」であった。

まず目を引いたのが導入の活動だ。「ノーベル平和賞受賞者をゲストに迎え、司会と二人のファン、オーディエンスがインタビューする5分間テレビ番組」という設定でプレゼンを行うのだが、生徒が登場人物になりきって堂々と発表していた姿が印象的であった。「テレビ番組」という秀逸な場面設定が発表に対する生徒の前向きな姿勢を引き出していたように思われる。次に展開に

関してだが、活動内容が「教科書内容の振り返り」、「ミニディベート」、「グループディスカッション」、最後に「全体で共有」という流れで、詰め込みすぎているのではという印象をもった。時間内に終わるのか疑問だったが、導入から展開、終末にかけてICTが常にフル活用され、大変テンポ良く授業が進んでいた。毎回の授業であるようなクオリティーのICTを準備することは相当な負担になることが予想されるため、簡単には真似できそうにないが、生徒が英語を使う時間を確保するには、本授業のような「時短」の工夫が必要である。一方、中盤の活動にあったミニディベートに関して、関口教諭は「どちらも説得力のある主張ができたのでドロー」という結果を示していたが、ディベートをするのであれば、勝敗をはっきりさせる必要があるのではないだろうか。引き分けにしたのは、授業実演の場ということでの教育的配慮だったのだろう。

全体として All English で教師—生徒、生徒—生徒の伝え合いが続く展開で、即興的な英語のやり取りを鍛えていきたいという関口教諭の思いが詰まった授業であった。

分科会第1部

コミュニケーションにおける「即興で伝え合うやり取りと発表」

～温故知新、新学習指導要領と明治から150年目の今とを対比しての取り組み、新しい夜明けが待っているぜよ～

発表者：湖南省立甲西北中学校 山口 朋久 教諭
助言者：京都外国語大学 杉本 義美 氏

新学習指導要領で示された「即興で伝え合うことや話すこと」を中心に据え、スローラーナーの力を伸ばしていくための方法を探っていく研究である。即興でのやり取りや発表ができるようになるには、まずは生徒の不安を少なくし、様々な仕掛けが組み込まれた「話す活動」によって自己効力感を高める必要があると仮定している。また、即興で話す力を日本にいながらにして身につけた明治の先人たちに習い、当時行われていた英語学習法の優れた点に着目。彼らが取り組んでいた「型を重視した学習方法」を活用し、即興的な対話力を鍛える術が紹介されていた。以下に示すのは、生徒が「力がついた」と支持した活動で、特筆すべきだと感じたものである。

(1) お助け90秒の活動

各ユニットに登場する新出語の一部や既習の重要語句のリストを使って、ペアで行う語彙学習。一方がリストにある50の日本語を相手に向かって素早く英語にして言いき、相手は言えているかどうかチェックする。これを90秒間で行う。相手はヒントを与えたり、答えを導いたりすることも可能で、協同的な活動といえる。生徒からの評価も高いようだ。

(2) レベル別音読

レベルに応じて教科書本文を音読していく活動。私も早速、以下のような音読ワークシートを作成し、実践してみた。徐々に負荷を高めていくので、脳をフル回転させて生徒は取り組んでいた。

Level ①

Political Life

In 1988, ～があった a movement for democracy ミャンマーで. A great number of 人々 who joined it were killed. 人々は needed a strong leader, そして asked アウンサンスーチーに to join

them. 彼女は accepted, そして decided to work for 彼女の 国.

Level ②

Political 生活

In 1988, ～があった a 運動 for democracy ミャンマーで. A 非常に number of 人々 (どう
いう人々かという) joined それに were killed. 人々は needed a 強い leader, そして asked
アウンサンスーチーに to join 彼らに. 彼女は accepted, そして decided 働くこと(2) for 彼女
の 国.

Level ③

政治の生活

1988年に, ～があった a 運動 for 民主主義 ミャンマーで. 非常に多くの(4) 人々 (どうい
う人々かという) joined それに 殺された(2). 人々は needed a 強い 指導者を, そして 頼んだ
アウンサンスーチーに to join 彼らに. 彼女は 受け入れた, そして 決めた 働くこと(2) for 彼
女の 国.

Level ④

政治の生活

1988年に, ～があった a 運動 ～のための 民主主義 ミャンマーで. 非常に多くの(4) 人々
(どういいう人々かという) 参加した それに 殺された(2). 人々は 必要とした a 強い 指導者
を, そして 頼んだ アウンサンスーチーに 参加するよう(2) 彼らに. 彼女は 受け入れた, そし
て 決めた 働くこと(2) ～のために 彼女の 国.

生徒の意見・考えを引き出すための授業実践

～リフレクティブ・プラクティスを通して～

発表者：大阪府立槻の木高等学校 南 侑樹 教諭

助言者：福井工業高等専門学校 藤田 卓郎 氏

リフレクティブ・プラクティスという言葉は、内省的実践という意味である。南教諭は授業者の記録と生徒の声を拾い上げ、それを授業改善に生かしていった。本研究は、その授業改善の過程を紹介するという内容であった。具体的には、毎回授業の略案をつけ、それに対して授業中自分が感じたことを記述しておき、助言者との対話に生かす。また、授業アンケートを頻繁にとり、各活動に対する生徒の感想や意見を指導方法やワークシート作りに反映していくということも行っていた。いわゆるPDC Aサイクルのような過程を教師も踏んで、授業改善に生かしているのである。

リフレクティブ・プラクティスと聞くと取り組みにくいと感じるかもしれないが、授業についてのちょっとした同僚との会話であったり、生徒に感想を聞いたりすることもリフレクティブ・プラクティスである。少しだけでもよいので、常にそのような観点をもって授業作りに取り組むことが最終的に大きな差となって表れるのではないかと感じた。